

『エチカ』第二部定義2によれば、事物の本質とはそれなくしては事物が存在しえないものであるが、同時に「事物なくしては存在することも考えられることもできないもの」である。すべての事物にはそれ固有の本質があると考えられている。この考えを受け入れるならば、複数の個物(例えば人間)が本質において一致するというようなことはありえない。つまり、スピノザの本質概念は個物の特異性を徹底的に肯定するものなのである。逆から見れば、個物の存在を何らかの同一性に還元して理解することは不可能とされているのである。このような本質概念を成立させている論理の中心には、本質と現実存在のあいだの伝統的な区別を否定する論理が存在しているように思われる。

ところが、この点はこれまでのスピノザ研究においてほとんど指摘されなかった。『エチカ』もまた本質と現実存在の区別というフレームを通して読まれたからである。しかし、この読みは誤りである可能性が極めて高い。従来からの解釈によれば、個物の本質は現実存在とは別の存在領域において決定されている。では、個物の本質はいかにして決定されているのか。従来の解釈はこの重要な問いかけにこたえることができない。これに対し、『エチカ』のテキストを再構成していくと、各個物が現実存在へと決定される論理の中に本質の生成の論理を認めることができる。つまり、個物の特異性という極めて重要な考えの根拠とされているのは、本質が現実存在の中で発生するという論理なのである。この点を主張するために、本質と現実存在を争点にして『エチカ』のテキストが再構築される。以下、論点の概要を示す。

スピノザによれば、唯一の「実体」である神の属性が内的に「変容」することによって「様態」としての個物が発生する。『エチカ』第一部定理25系によれば「個物とは実体の変容すなわち神の属性を特定の決定された仕方では表現する様態に他ならない」。一見すると、この論理から個物の特異性は帰結しないように思われる。なぜならすべての個物が神の属性の「変容」にすぎないというのなら、それらの本質は神の属性の本質と同一であると考えうるからである。そこで問題は、このテキストをどう読むかである。属性という同一性の複製として個物が理解されているのだろうか。そのように理解された場合には、属性と個物は本質において同一であり、したがって諸個物の区別はたんなる数的区別であることになるだろう。ところが『エチカ』の他のテキストがこの読みを否定しているように思われる。

このテキストによれば諸個物は神の属性を「表現」している。しかし、すべての個物が同じ仕方では「表現」しているのではない。そのように解釈しうる根拠は『エチカ』第一部定理24すなわち「神から産出された諸事物の本質は現実存在を含まない」ということから出てくる。個物が神の属性を「表現」するには現実存在していなければならないが、個物の本質には現実存在が含まれていない。したがって「表現」する以前に、現実存在に決定されていなければならないのである。では、個物はいかにして現実存在に決定されるのか。『エチカ』第一部定理28によれば、現実存在する他の個物によってであ

る。

「あらゆる個物すなわち有限でかつ限定された現実存在を持つ各々のものは、同様に有限でかつ限定された現実存在を持つ他の原因によって現実存在しかつ何ごとかをなすように決定されるのでなければ、現実存在することも何ごとかをなすように決定されることもできない。そしてこの原因もまた、有限でかつ限定された現実存在を持つ他の原因によって現実存在しかつ何ごとかをなすように決定されるのでなければ、現実存在することも何ごとかをなすように決定されることもできない。こうして無限に進む」。

テキストに何度も出てくる「他の原因」とは他の個物のことである。他の個物は神の「変容」として現実存在するものである。その「変容」がさらに「変容」することによって新しく個物が現実存在し、属性の本質を「表現」する。このような「変容」の連鎖が現実存在を作り上げていると考えられる。重要な点は、この連鎖の過程の中で同じものが二度生成することはないという点である。すなわち、現実存在に関してまったく同一の個物は生み出されえない。決定の連鎖における現実存在の順序が異なるからだ。それが個物の本質を構成していると考えられる。つまり「特定の決定された仕方では」現実存在しているということそれ自体が個物の本質なのである。

本質が現実存在の次元に生成するという考えは『エチカ』第一部定理25の中に読み取ることができる。「神は事物の現実存在だけでなくその本質をも生み出す原因(causa efficiens)である」。神は事物を現実存在に決定する原因である。しかしそれだけでなく、事物の本質をも生み出しているという。この構文(現実存在が主で本質はそれに付随して言及されている)に注目すれば、事物を現実存在に決定することによって本質を生成させているのであるという読みが成立するであろう。「個物とは実体の変容すなわち神の属性を特定の決定された仕方では表現する様態に他ならない」という問題のテキストは、この定理の系として現れているのである。こう考えれば、諸個物の区別が属性という同一性の下でのたんなる数的区別に還元されることはありえないということになるであろう。

以上の解釈の焦点は、個物が現実存在に決定される局面それ自体を個物の本質の生成として理解することにある。個物の特異性を構成する本質は、「変容」の連鎖の中で生成するのである。すでに言及したが、この解釈における重要な点は、現実存在する個物の本質がその外部との関係なしには理解できないという点にある。無限に進む神の「変容」という因果的過程においては、現実存在する事物の本質を決定するのはつねにその外部なのだ。ひとことでまとめれば、神とは決して現前しない外部のことであり、個物の本質とはそのような外部において生成するものなのである。本質すなわち個物の特異性を構成するものは、逆説的にも個物に内面化されることができないという点がここから帰結するであろう。個物の外部において発生した本質は、現実存在する個物にとっても外部であり続けると考えられるからである。個物の特異性はその外部性と表裏の関係になっているのである。『エチカ』において、人間という個物が自己の特異性を肯定するという生の主題が、神の認識と本質的な結びつきを持つとされているのはこのためなのである。